



名曲の向こう側

第32回

フランツ・シューベルト(1797-1828)は、シャイで誠実な好青年。父親と対立して実家を飛び出した彼を支えたのは、良き理解者である友人たちでした。彼は、友人の家に居候し、心の赴くままに歌曲を書いては、気の置けない友人たちの集いで披露しました。

シューベルトは、当初、新作歌曲を自ら弾き歌いしていましたが、あるオペラを観て宮廷歌手ミハエル・フォーグル(1768-1840)の歌声に魅せられ、フォーグルに自分の歌曲を歌って欲しいという欲求を募らせます。そこで、当時シューベルトと同居していた親友フランツ・フォン・ショーバー(1796-1882、「音楽に寄す」D547などの詩の作者)が姉の人脈を辿ってフォーグルに接触、1817年のある晩、ショーバー宅でフォーグルとの面会が実現することになりました。この時フォーグルが初めて歌った記念すべきシューベルト作品は、親友の詩人ヨハン・マイアホーファー(1787-1836)の詩による歌曲「眼の歌」D297と「メムノン」D541、そして、ゲーテの詩による歌曲「ガニユメート」D544の3曲。歌い終えたフォーグルは、「あなたは素質があります。でも、コメディアンでなさすぎます。ペテン師でなさすぎます」と、シューベルトのピュアでひたむきな音楽性をユーモアとともに讃え、以後、サークルに加わって多くのシューベルト歌曲を歌うこととなります。

この初セッションの選曲には、シューベルトとマイアホーファーによる周到な戦略が垣間見えます(堀朋平氏が鋭く推察しています)。「メムノン」「ガニユメート」はギリシャ神話に依拠した詩で、フォーグルはギリシャ神話を原語で読む教養人でした。戦死したメムノンが、母アウロラ(暁の女神)への想いを詠う「メムノン」は、レチタティーヴォ風で劇的な異色作で、2人が意識的にフォーグルを想定して書き下ろしたものと思われます。この曲は後日フォーグルに献呈されました。

シューベルトとマイアホーファーはその後1818年から2年間ともに暮らし、その時から

あの曲って、そういう曲だったの!? ピアニスト内藤晃が、思わず「へえ!」と唸ってしまう「名曲の向こう側」に皆様をご案内します。

シューベルトとマイアホーファー

内藤 晃



シュヴァント画
「シュバウン家におけるシューベルトの夕べ」
1868年
サークルの一員だったシュヴァントが描いた絵で、歌うフォーグルとそれを伴奏するシューベルトの右にマイアホーファーの姿が描かれている

実に47曲もの歌曲が生まれました。マイアホーファーは、生活のために書籍検閲官の仕事をしていましたが、詩人の精神と検閲の仕事という自己矛盾から、しだいに心を病んでしまいます。パウエルンフェルトの回想によると、シューベルトの音楽を聴くひとときがマイアホーファー唯一の心の拠り所でした。「私にとってシューベルトは、ふさわしい旋律をもって人生の中を、ありのままに、誠実に、私を導いてくれる天才であったし、またあり続けている」とシューベルトを追悼したマイアホーファーは、友の死の8年後、建物の3階から飛び降りて自らその人生に終止符を打ちました。

参考文献=ドイッチュ編/石井不二雄訳
『シューベルト 友人たちの回想』白水社
堀朋平『〈フランツ・シューベルト〉の誕生』法政大学出版局

推薦盤=Schubert: Mayrhofer Lieder/
クリストフ・プレガルディエン(テノール)
アンドレアス・シュタイアー(フォルテピアノ) [Teldec]

内藤 晃(ないとう・あきら)

ピアニスト・指揮者・作曲家。

「もっと深い音楽体験」への道案内をライフワークとし、独自の切り口による講座やレクチャーコンサートが好評。オーケストラの弾き振りも行う。「おんがくしつトリオ」主宰。



(イラスト=◎いとう まりこ)